



12月に注意すべき感染症～インフルエンザ・新型コロナ～

インフルエンザ



2024年の12月に注意しなければならない感染症について挙げていきます。まずはインフルエンザです。図1. は2024年5月以降のインフルエンザの定点当たり報告数の全国平均値と大阪府の値の週毎の推移を示しています。9月に入ると定点当たり報告数は上昇傾向を示し、**11月には急増が見られています。今後インフルエンザの報告数は更に増加し、12月には流行は本格化して**くるものと予想されます。現在国内で循環しているインフルエンザウイルスは、大半がA/H1N1pdmですが、一部A/H3N2が見られています。B型はA型よりも流行開始の時期が遅くなる傾向が強く、前シーズンと同様に2025年に入ってからB型の罹患者が増加してくる可能性は高いと思われます。

当院の職員を対象としたインフルエンザワクチンの集団接種は、10月の最終週に終了し、1,208名の職員の接種が終了しました(接種率86.7%)。健診センターでの個別接種は可能ですので、**インフルエンザのワクチンの接種がまだの方は、早めに接種を済まされることをお奨めします。**

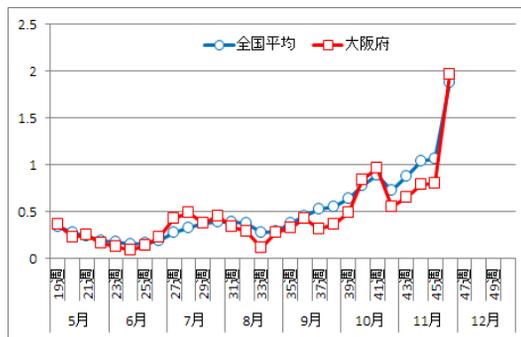


図1. インフルエンザ定点当たり報告数の全国平均値と大阪府の年別・週別推移(2024年第19～46週)

新型コロナウイルス感染症

次に、新型コロナウイルス感染症について言及します。サーベイランスのデータを見ると、新型コロナの患者発生数は、11月に入ってからは減少から増加に転じつつあると推測されます。秋に入って、JN.1株からの発生株であるXEC株が海外のみならず、国内でも検出されるようになってきており、注目されつつあります。このXEC株は、免疫逃避力と伝播力に優れていると報告されており、同株が今冬の流行の主流株となる場合は、ある程度規模の大きな流行となると考えるべきです。

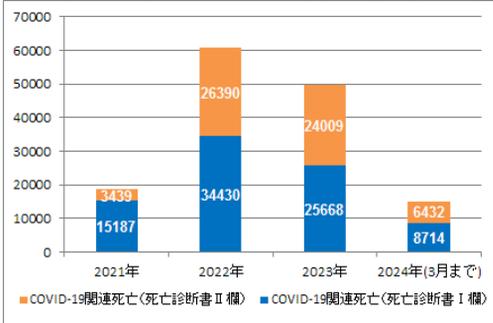


図2. 新型コロナウイルス感染症関連死亡者数年別推移(2021年～2024年3月まで)※

※厚生労働省のホームページ「死亡診断書(死体検案書)の情報を用いたCOVID-19関連死亡数の分析」(<https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/00001.html>)に掲載されているデータを使用して作成

厚生労働省のホームページ「死亡診断書(死体検案書)の情報を用いたCOVID-19関連死亡数の分析」(<https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/00001.html>)に掲載されているデータを用いて、新型コロナウイルス感染症に関連した年別の死亡者数のグラフを作成してみました(図2)。関連死亡を含めると、2022年は約6万人、2023年は約5万人が、国内で新型コロナウイルス感染症によって亡くなっていると死亡診断書に記載されていることとなります。これほど死亡者数の多い感染症は、他にありません。

2023年の5類感染症への移行により、インフルエンザと同程度と軽視されることも少なくありませんが、疾患のインパクトは高いままであり、特に高齢者にとっては深刻な感染症であることを認識して、これからも対応にあたっていくべきであると思われます。

(感染管理室 安井 良則)

CD遺伝子検査が院内で実施できるようになります！

CDとはClostridioides difficileの略のことで、抗菌薬関連下痢症/腸炎の原因菌の一つと言われています。自らを守るために芽胞というものを形成するので、アルコールが効かないというなんとも厄介な菌です。**CDの検査はプリストル便形状スケール(右図)の5～7に該当する便が24時間で3回以上続く場合に行います。つまり、1～4に該当する便は検査に適さないということになります。**オーダーした時は下痢をしていても、タイムリーに検体採取を行うことが難しいため、**やっとな検体がとれた！と提出された時にはもう下痢をしていない…なんてこともあるので提出する前に、形状確認をしていただくと助かります。**



毒素陰性・抗原陽性

現在、当院では迅速キットを用いてCD検査を行っていますが、たまにCDの毒素(Tox)は陰性だけど抗原(Ag)陽性の結果(左写真)が出ることがあります。この場合、Clostridioides difficileの存在を示すが、毒素に関しては産生しない株の可能性と毒素を産生する株だが検出感度以下のため検出できなかった可能性の両方を考慮して判断する必要があり、接触感染対策の継続を余儀なくされていました。

非常に悪い(約10分間)	1	コロコロ便	便くコロコロの塊状の便
↑	2	硬い便	ソーセージ状であるが硬い便
	3	やや硬い便	表面にひび割れのあるソーセージ状の便
	4	普通便	表面がなめらかで柔らかいソーセージ状、あるいは蛇のようなとろろをきく便
↓	5	やや軟らかい便	はっきりとしたしわのある柔らかい半分固形の便
	6	泥状便	塊がほぐれて、ぶにぶにの不定形の小片、泥状の便
	7	水様便	水様で、固形物を含まない液状の便
非常に悪い(約10分間)			

図. プリストル便形状スケール

しかし、**今回導入された遺伝子検査を実施すれば毒素を産生する株かどうかわかるようになり、遺伝子検査で毒素の産生が認められなければ接触感染対策が不要となり、隔離解除ができるようになります！**検査を実施するには様々な条件がありますので、事前に感染管理室へご相談ください！
(細菌検査室 黒田 真莉)